

☆☆☆ Library Eye 2022 ☆☆☆

第25号 2022年4月1日(金)

発行元 明星中学校・高等学校 図書館



【2021年度 ベストリーダー賞 受賞者発表！】

ご入学、ご進学、おめでとうございます。今年度もどうぞよろしくお願い申し上げます。保護者の皆様に向けての図書館だより『Library Eye』も25号・3年目を迎えました。今号からは生徒の皆さんにもClassiで配信して、目にしてもらえようになりました。読書活動の一助になれば幸いです。

さて、毎年度末に中学校と高校それぞれの貸出冊数上位3名に**ベストリーダー賞**を授与していますが、昨年度の受賞者は下記の皆さんに決定しました(学年は2021年度のもの)。

中学の部第1位は2年生の匿名希望さん(201冊)、第2位は3年生の辻 絆奈さん(140冊)、第3位は2年生の友野 竜之助くん(107冊)です。

高校の部は2年生がベスト3を独占しました。第1位は石原 梨世さん(61冊)、第2位は土釜 菜々花さん(57冊)、第3位は松本 直樹くん(50冊)でした。**受賞した皆さん、おめでとうございます！**(司書)

※ベストリーダー賞は今年度より貸出冊数ではなく、貸出タイトル数でカウントします。

【K-文学ブーム！ 韓国の作家作品が熱い!!!】

『イカゲーム』やBTSの大ヒットに代表されるように、私たちの周りでもエンタメ、コスメ、スイーツなどを中心に韓国ブームが続いていますが、今、K-文学も注目を浴びています。

図書館でも、2020年に『**アーモンド**』(ソン ウォンピョン著)が本屋大賞翻訳小説部門で1位となって以来、韓国作家の作品を多く購入しています。その中で一番読まれているのが、映画化された『**82年生まれ、キム・ジョン**』(チョ ナムジュ著)です。韓国における女性差別の実態を描いており、“顔のない顔”の表紙も話題となりました。小説だけでなく、自己啓発の要素のあるエッセイも人気です。2年以上続くコロナ禍で不安やストレスを感じることも多い中、『**私は私のままで生きることにした**』や『**ほっとい**』

て欲しいけど、ひとりはいや』といったエッセイ本は、タイトルやイラストがキャッチーで、癒しを与えてくれているようです。K-文学は韓国社会の閉塞感や生きづらさ、フェミニズム、ジェンダーレスなどを描いたものが多く、現在の私たちに共感できる点がたくさんあります。チョ・ナムジュの新作『**ミカンの味**』や心温まるストーリーでドラマ化された『**保健室のアン・ウニョン先生**』…等々、装丁もとても可愛いので、新しい分野の読書に挑戦してみたいかがでしょうか。韓国語やレシピ本(右表)もありますので、興味のある方は是非どうぞ。(司書)



	書名	著者名	出版者	刊年
文学	カステラ	パク ミンギョ	クレイン	2014
	82年生まれ、キム・ジョン	チョ ナムジュ	筑摩書房	2018
	フィフティ・ピープル	チョン セラン	亜紀書房	2018
	野蠻なアリスさん	ファン ジョンウン	河出書房新社	2018
	アーモンド	ソン ウォンピョン	祥伝社	2019
	わたしに無害なひと	チェ ウニョン	亜紀書房	2020
	保健室のアン・ウニョン先生	チョン セラン	亜紀書房	2020
	ハイト	イ ヒョン	イーストプレス	2021
	三十の反撃	ソン ウォンピョン	祥伝社	2021
	ミカンの味	チョ ナムジュ	朝日新聞出版	2021
AREH	私は私のままで生きることにした	キム スジョン	ワニブックス	2019
	ほっとい欲しいけど、ひとりはいや	ダンジョンズネイル	CCCメディアハウス	2021
	すべての瞬間が君だった	ハ テワン	マガジナハウス	2020
	地球の歩き方aruco東京で楽しむ韓国		地球の歩き方	2021
関連本	はじめまして韓国カフェスイーツ	福本 美樹	家の光協会	2021
	高校生からの韓国語入門	稲川 右樹	筑摩書房	2021
	韓国語の語源図鑑	阪堂 千津子	かんき出版	2021
	基礎から学べるはじめての韓国語文法	金 孝珍	ナツメ社	2021

【「明星ホルモン」でガンバロー!!!】

「明星ホルモン」という言葉をご存知でしょうか？

ホルモンというと、すぐにあの焼肉屋のホルモン焼きのことを連想しがちですが、ここでは内分泌系の情報伝達物質のことを指します。明星の教職員は、この「明星ホルモン」のお陰で、元気良く仕事ができるのです。今日は朝から体調が悪いなあと思いつつ出勤しても、「センセイ！」と生徒たちが来てお話をしたり授業をしたりしていると、たちまち元気になります。これらはすべて生徒たちから「明星ホルモン」をもらっているからなのです。

ノーベル文学賞を受賞したウィリアム・イエイツが「**教育とは、バケツを水で一杯にすることはなく、火をつけることだ**」と語っています。「バケツを……」というのは、これでもか、とばかりに知識・情報を詰めこむことで、「火をつける」とは、学び意欲を引きだすことでしょう。

この4月から総合的な学習の時間で本格的に導入される「**探究型学習**」も、本来は「**子どもたちにテーマを与えてみたり懇切丁寧に学習プロセスを提示してみたりするような指導は避けなければならない**」のですが、どうしても世話を焼きたくなくなってしまうのが教師の性(さが)なのでしょうか、手をかけすぎて「火をつける」どころか「水を差す」ようなことにもなりがちです。**ほんとうに必要なことは、教師みずからが「探究人」であることだけ**なのですが。

※「私は人様から健康法をたずねられると『明星ホルモン』があるからと答えるというお話をあなた方にしましたね。『明星ホルモン』とは、小学校や幼稚園の皆様方が童心より発散される何ともいえない純粋無垢の神様の如き人間性の香という無形の力であります」(児玉九十・明星小学校『第十回卒業記念文集』・昭和39年3月24日発行)(図書館担当教諭 川辺)

【「手塩にかける」とは?】

手塩にかける、と言います。

その起源は、遠く室町時代まで遡ることができます。当時、朝廷に於いて「食膳の不浄を払うために、小皿に盛った少量の塩」のことを「手塩」と言いましたが、時代が下ると、料理の味を調えるために食膳に添えられた塩のことを、こう呼ぶようになりました。そこから「自分で直接世話をして大切に育てる」という意味が生まれたのです。しかし、これも世話を焼きすぎれば過干渉で、かえって子どもから自立心や自主性を奪うことにもなりかねません。まさに「塩加減」は難しいところです。

明星では「**人格接触による手塩にかける教育**」を教育方針の1つとして掲げていますが、この場合の「人格接触」とは薫陶ということでしょう。優れた人格によって生徒を育てるわけですから、教師自身も学びによって精神的に向上することが必要です。「**手塩にかける**」とは、けっして「手取り足取り」面倒を見ることではありません。いつも生徒のことを考えている、そばから見守っている、ということです。



明星学苑の創立者である児玉九十先生が、江戸時代中期の俳人・与謝蕪村の「菊作り汝は菊の奴かな」という俳句を採りあげて、「**教育家は、生徒の下僕のような気持ちになってこそ、ほんとの教育ができる**」(『**両親教育**』)と述べていらっしゃる。つまり、全身全霊をこめて1日24時間、仕事に打ちこむことで、初めて生徒を導くことができる、ということです。

以前、NHKの番組で、桜守の佐野藤右衛門が、世話を頼まれた桜が植えられている土の状態を知るために、指先でさっと土をつまんで口に入れ、その味を確かめていたのを見て驚いたことがありました。それで酸性かアルカリ性かがわかるというのですから、まさにプロフェッショナルです。ほんとうに「**手塩にかける**」教育を実践するためには、私たち教師も『**塩一トンの読書**』(須賀敦子)をする覚悟がいるのかもしれない。(図書館担当教諭 川辺)

